

Title	日持上人の大陸渡航について(下) : 宣化出土遺物を中心として
Sub Title	Travels of Nichiji, a Japanese Buddhist priest in Kamakura period, to Yuan China (III)
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.2 (1957. 11) ,p.1(137)- 49(185)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19571100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日持上人の大陸渡航について (下)

—宣化出土遺物を中心として—

前 嶋 信 次

十、和林教化の説

中里氏は稿を進め「日持上人が大乗妙法、即ち眞佛教の代表として入蒙し、和林（カラコルム）に重要な事蹟をのこし、和林を妙化した證跡は歴々としていて」これを「完全に調査し得た」といつている。そしてこれを「入蒙（和林）の卷」の中で細叙しているが、大要は次の如くである。

「マルコ・ポーロの通過した沙漠道により、上都—多倫諾爾—伊利—烏得—薩伊烏蘇—烏尼を経て裸克^{ラク}に至った。こゝは沙漠中のオアシスで、草木しげり、川が流れ、清水が湧いている。日持上人はこの裸克を發見し、立寄って休息し、清水をば法華泉となづけた。後年、元朝最後の帝たる順帝の一族が、明軍に追われ、和林に逃げる道すがらここに休息した。驛亭の主人が曰く『この清水は法華泉と申し、かつて妙法僧日持上人が發見し、かく名づけた』と。一族のものはすでに大都燕京で上人の事を聞知していたところからひとしお上人の高徳を偲んだ、このことは一族の『八達^{バイグ}』という人の漠北行と題する紀行文中に書き残してある。」

「余（中里氏）が三音諾顔部の蒙古親王家で發見した和寧路總覽という元時代の『和林記録』によるも上人の事蹟は

明白であるが、和林における上人の事蹟は燕京と相違し、今日といえども實物的にのこっている。日持上人が和林に乗込んだときは、仁宗帝から托された法華經を萬安宮に納める一件もあり、かつ上人の香名はすでにこの地にも聞えていたためもあって、上下をあげて城外數里の先まで歓迎し喇嘛の如きは佛教の大聖光臨すと、むしろ狂喜して迎え、これより始終その味方となって教化を助けた。萬安宮殿では、特に經殿を設け、上人をこの殿内に住居せしめた。しかしやがて上人は宮中の待遇を固辭し、莫々都に冬の法華寺を建て、セレンガ河の畔には夏の法華寺を建てた。いままで熱心に布教を續けていたカトリック教徒も、日持上人が和林に説法して後は、とても布教は行われぬことを察し、教堂を閉鎖して本國に引あげてしまった。もし元にして滅亡せず、よし燕京の元朝が滅んでも蒙古の和林が存立し、また明の天下となって佛教壓迫の暴擧がなかったとすれば、和林の國教は事實的に法華妙法となり、喇嘛も全く妙法化してしまつたであらう。^(二〇)

このような見解はもちろん成立たない。カラコルムは世祖クビライの即位後、モンゴリアの單なる一中心地に轉下し、元朝一代を通じて、あるいは和林行省（後の嶺北行省）の所在地、あるいは和林宣慰司、和林都元師府の治所として餘喘を保つにすぎなかったのであるが、元朝が滅び、いわゆる北元の根據地となるに及んでふたたび歴史的重要性を復活したと愛宕（松男）教授は記している。^(二一)かくて歲月はうつつて、この地はトゥシエトウ汗の牧地となり、ラマ教大寺院の所在地としてわずかに地方都市の面影を維持するにすぎない有様となった。現在のエルデニツオの遺跡が、往年のカラコルムであることが決定するまでには一八七七年のポズドニェフ Pozdonev や一八九一年のラドロフ Radlov 等の探檢の成果と考證とをまたねばならなかったのである。それにしても明朝が佛教を壓迫して、遠くモンゴル族の勢

力下の漠北にひろまったと中里氏が稱する日蓮宗までを滅ぼしたとはまことに奇説という外はない。

「齊チチルリク々爾里克にある三音諾顔汗親王家は南無妙法蓮華經の曼荼羅を祕藏している。しかし明治三十九年から四十年にわたる外蒙の内亂で親王家も襲撃されたから、現在も保存しているかどうかは疑問である。」

「私は和林の舊址をたずね『和寧路總覽』により上人の寺であった莫々都の冬寺やセレンガ河畔の夏寺を探したが、今は荒廢してその跡は發見出來なかつた。しかし三音諾顔部の蒙古人はそこが傳説的に法華寺のあつた跡であると信じている。」

「蒙古人は上人の教化されるまでは灌漑農耕を知らなかつた。上人は和林の政府に『灌漑農産の方法』を建議した。各所に泊井（池）を設け、原野を灌漑して米麥その他の穀物、蔬菜、果樹を殖産し、棉、麻を植えることをすすめた。政府も東方の聖僧の議をいれ、灌漑開墾に着手したので、ここに沃野千里をつらね、現にいまもその幸福をうけている。實に上人は蒙民永久の大恩人である。和林は上人の大恩を紀念するため大農田の泊井（貯水池）に法華井、妙法井、日持井の名を附した。現代でも三音諾顔部その他を視察するに法華井等の名がのこっている。獨り和林地方のみでなく、科布多コブド、阿爾泰烏梁海、唐努烏梁海にも法華井、妙法井、日持井の名が傳説的に傳わっている。上人の事蹟は歴然、もとより一點の疑を容るる餘地はない。」(一一三)

廣漠たる蒙古高原も數年にして沃野と化し、數千年來、水草を逐って生活してきた遊牧の民も一朝にして農耕の民と化したのである。ここで中里氏は筆を轉じて、元末の勇將王保ワシボ々の事蹟を述べている。この人は、敗殘の元軍をひきい、明の驍將徐達の十萬の軍と陝西、山西方面で戦い、ついに敗れて和林に奔った。そこで大農田がひらけて「米

も麥も、他の雜穀も豊富、野菜果實も豊富なを見て「驚喜し「全く日持上人の妙化と灌漑耕作を指導し獎勵された結果である」とわかった」とある。^(一三)外蒙古で米までとれるというのは王保々ならずとも驚く外はないであろう。この王保々が蒙古文でしるした記録を中里氏は烏里雅蘇臺で發見したよしであるが、その中の「日持上人謝恩録」なるものの邦譯をかかっている。譯者は本莊(可宗)教授、中里機庵共譯となっている。その内容は要するに大都を去った事情と、前述したような和林における活動とをのべたものである。中里氏はそのあとに「上人は五六年以上、和林に留錫された後、門人等に教化事業を托して去った。私が和林にて調査中、ある識者は、上人は和林、莫々都の法華寺で入寂された。その記録もあると主張していたが、上人が西域を望んで出發されたことは王保々の記録にもある。私は和林で入寂したとの説を採らない」と記している。^(一四)しばらく中里氏の記録によって、西域へとそのあとを慕って見よう。

十一、コス・ゴル湖畔入寂の説

最後は「入寂の卷」と題し、その第一節は「上人西域に入らんとして烏梁海を巡錫す」としてある。

「西域は今の新疆省である。上人は和林を去って、阿爾泰地方^{アルタイ}に行き、今の唐努烏梁海^{タンス・ウリアンハイ}を巡錫した。科布多^{コブド}からタルバガタイに行かず、ことさらに唐努烏梁海に迂廻したには重大な理由があった。和林的萬安宮で黄金の佛像を見て、その製作地をたずねたところ、黄金國から來たものであり、かつまた和林的宮殿の建築材料もそこから献上されたものと告げられた。黄金國とは阿爾泰山の西北の唐努烏梁海に外ならず、この世ながらの黄金寂光土であると知って、そここそ法華妙法を弘むべきであると考えたためらしい。米國の外蒙古探檢隊が昨年春、第三回目の探檢を行つたが、出發

に際し『われ等は世界最古のエデン・パラダイスを發見するであろう。けだしアダム・イヴのエデンは外蒙古にある』と聲言した。^(二五)とある。米國の探檢隊がエデンの故地を外蒙古に求めたというようなことも寡聞にして知らないが、そのあとの所に「しかしこの地方まで探檢が出来ないので九月を以って引揚げた」としてあるので、これ以上穿鑿すべきでなからう。「烏梁海は元時代において大黄金國であり、蓬萊極樂園であつた。現代もそうで、風景の絶佳なことも世界無比、ことに庫蘇古爾湖^{コスゴル}を取巻く一帯は全地球の神祕境であり、勝景であろう。」

「その途中、科布多にて相當の期間巡錫された形跡がある。露國の古い阿爾泰誌や帝政時代に烏梁海を調査した蒙古學者の記録には『東方から妙法僧が此地方を巡化』したことが簡單ながら書いてある。」

「上人の烏梁海黄金國に入ったことを證するには左の四大材料がある。この外にも有力な材料があるようであるが、私はよく知らぬ。一、烏梁海政廳の記録。二、庫蘇古爾湖畔韃靼文字の古碑。三、黄金道一名妙法道の由來。四、傳説による上人入寂の地。」

私の觀た唐努烏梁海はバイクム、ウロクムの二大流は沙金を以て埋めんばかりであり、サヤン、オイラの二大山はすべて金鑛であり、アルタイ山はもとと金の山で埋藏量は無盡藏であり。測量すべくもない。二大流に沿う廣大無邊の平野は穀物の産地で、米の如きは年々ありあまって腐敗せしめ、これを棄つるも牛馬も豚さえも食わぬ。何故ならば甘露の如き乳の出る牧草がゆたかであるからである。「遺憾ながらこの一文のみでも中里氏が、かの地に入らなかつた確證とするに足るようである。」

いふまでもなくタンヌ・ウリアンハイは外蒙古の北西隅を占め、大體北緯五〇度から五二度あまりに及んでいる。住

民の生業は狩獵と牧畜であつて、棄てるほど米を産するなどは笑うべき妄説といわなくてはならぬ。中里氏の説もこの邊までくると誠に大膽になり、破綻百出の態を示してきた。

「烏梁海政廳の記録(韃靼文字)には『大元英宗帝、至治の年、東僧妙持來り、法を説く』とあるし、政廳の人の語るところによれば、唐努にはもと妙法寺があつたし、上人は庫蘇古爾湖畔で說法し、ここで入寂した。もとの地方では死骸を野にすて、野獸に食わしていたが、上人が土葬し墳墓を建てることを教えたので、上人の埋所にも墓をたてた。棺には薩彦山の樺材を使用し、遺骸は黑貂の皮をもって包んだので、五六百年たつても腐敗するおそれはないといふ。烏梁海人は虚偽を知らぬといわれるから、私は政廳の語るところを眞實と思ふ。

庫蘇古爾湖畔韃靼文字の古碑は露國の學者、探檢隊の一行が二十年前に發見したもので、今でも湖畔に存在すると信ずる。碑文は

シュ・ハッ・ハー、アボカ、ダラニ

とあるが『妙々の佛が萬有を妙化する御經』の義で、韃靼語に通じた露國の學者はこれを

東方佛教の題目(露語ザクラヴィエ)

と意譯した。故に『南無妙法蓮華經』と譯して誤りなしと信ずる。」

「黄金道、一名妙法道は日本里で四十里にわたる言葉通りの黄金道で、露國のペー・グリエフ博士の報告書にも載っている。シベリアのクラスノヤルスク州ミスンスクから、エニセー河を經由し、唐努烏梁海に入る道路で、河には沙金、陸には金鑛、燦爛として目を眩するばかりである。日持上人はこれを妙法道と命名した。ただし、上人の見た黄金

道路と前記のペー・グリエフ博士のつたえたものが同一であるかどうかはわからない。しかしロシア人が後者を神の『トーンキーすなわち誠に妙々の道』と唱えているところから見ると、この黄金道路は上人が発見したものかも知れない。

「烏梁海の傳説によれば、上人は庫蘇克爾湖畔の巴音^{バイオン}で入寂し、そこには古墳があるという。湖上に畫のような島があり、蓮華島とよばれている。私がかの地で調査したところでは上人が湖畔の法華堂で入寂されたことは疑うべくもない。それは元の泰定元年または二年（西曆一三二四、または二五年）の三四月の交であったと考えられる。

なお科布多にも東僧日持を開山とする大吉利法華承化寺があり、上人はここで入寂されたとの説があり。日塔と法塔が残っているが、一つは日持上人の墓、一つは上人所持の經卷を納めた塔であるという。私は前記の如く調査したが記念物を發掘するまでには至らなかった。これについては經費の點も察してもらいたい。また同じ理由から上人に関する種々の秘録、寫本、寺院内にある妙法關係の額や法幡などを日本に持ちかえることが出来なかった。きく所によれば今春（大正十五年？）米國の大探檢隊が和林に入り、萬安宮を發掘する計畫のよしであるし、更に都合によっては庫蘇古爾の神祕湖一帯を發掘する準備もあると聞き及んでいる。萬安宮を發掘したならば、必ず法華經殿も現われるであろうが、これはもと黄金、銅で建てられたのであるから、或は完全なものが發掘され、上人の事蹟も天下に發表されるであろう。庫蘇古爾湖畔の墳墓も棺材が樺で、靈骸を黑貂の皮で包んであるから、六百年後の今日でも多少の形骸を存するであろう。

私は事情が許すならば米國大探檢隊と同行したい。そして私の調査した上人の遺蹟を發掘したい。もし之が不可能な

らば、別に宗門志士の一團を組織し、目的地に向いたい。費用は十萬圓内外で足る。

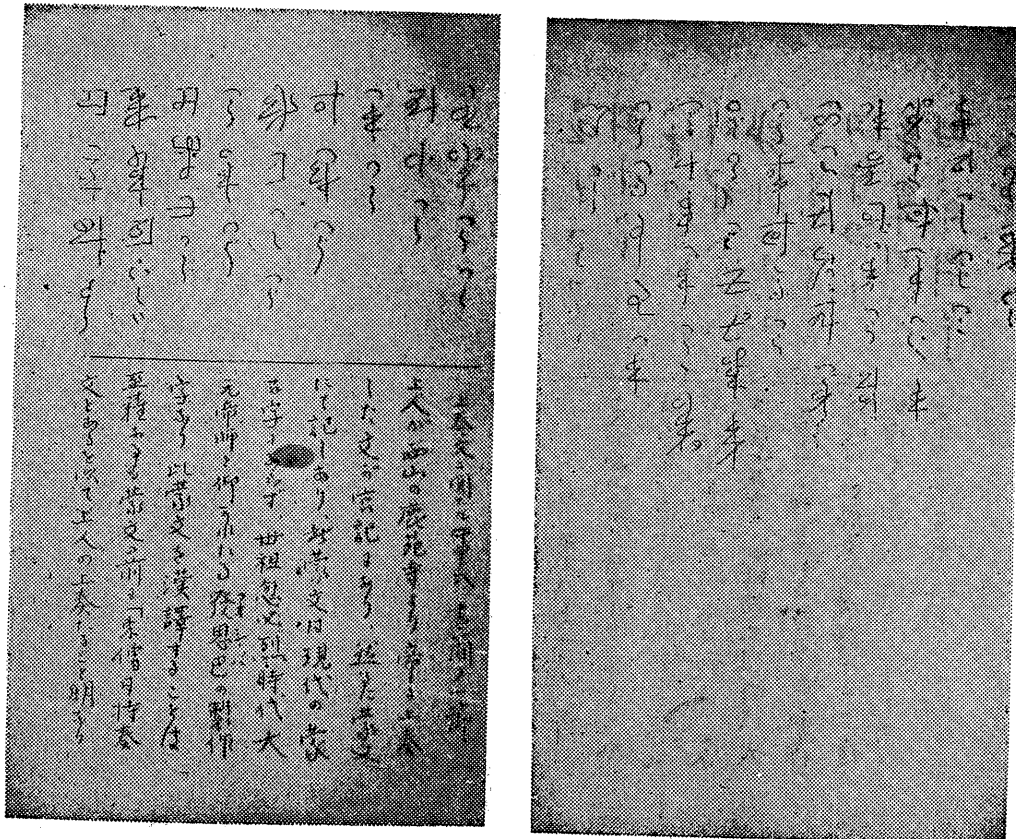
終りに一言することは、外蒙古喇嘛教が年々衰え、一種の妙法教なるものが、三音諾顔部を中心として興るうとして
いることである。これ何の前兆ぞやと叫びたい^(二二六)云々」

中里氏の「日持上人大陸踏破事蹟」は大體右の如きものである。更に卷末に同氏が發見したという元朝宮廷の祕録
「宮記」の原文の一部というものを掲げてある。これは五頁にわたり、全部で四十一行ある。蓮永寺の丹澤日京上人の
後書と思われるものに

「右ハ『宮記』ニ見エタル日持上人上奏文(蒙古文)ニシテ中里氏ノ筆寫ヲ更ニ臨摹セシモノナリ。筆者固ヨリ蒙字
ヲ解セズ只僅カニ字形ヲ寫スノミ。定メテ愆誤多カラシモ參考トシテ茲ニ添付ス。」とあり、その後、この宮記發見の
事情を中里氏自ら記した書簡の一節を掲げている。

「宮記の發見……に關する中里氏書簡の一節『日記帳の中から』光緒二十七年四月十五日(明治廿七年)庫倫着、二
十日仁宗皇帝の侍臣蒙古人曹哥の書きたる『宮記』を喇嘛廟書庫に發見す。寫本なり。此寫本の宮記は山西、甘肅にも
一部宛發見せし由を聽く。故に庫倫のものが原文なるやは疑問とするも、庫倫のものは黃紙にて書き漢文蒙文の二様を
併用しあり。元時代のものと十分に肯定さる。庫倫にての話にては上都陷落の際蒙古に持去りたるもの也と。珍書な
り。宮記は仁宗帝時代の宮中の祕記なり。此の宮記により日持上人と仁宗皇帝の關係が明かとなれり。若し元史編纂の
時宮記を發見せば必ず元史に載るものと信じ、且つ余の發見せしを不思議と感ず。」

そして中里氏によればここに掲げる蒙古文はバспа文字で、日持上人の上奏文だとのことである。東京外國語大學の



第六圖

中里氏が庫倫で發見した「宮記」と稱するものの一部

蒙古語研究室に持参して見たが、豫期の如く解讀不可能のものとなされた。バспа文字を讀む小澤重男氏が精細に調べてくれたが、このような文字は未見であるとのことである。中里氏がこれを解讀し得たとは誠に不思議といわなければならぬ。念のため、その第一葉と第二葉をかかげておく。(第六圖)

右の如く中里氏は多くの史料や遺蹟を見た如く述べているけれども、それらは悉く遠慮なく云えば信用できぬものであり、また他の人がこれを追及しようとしても能わぬような条件がつけ加えてある。ただひとつ、寫し歸ったという宮記なるものも、このように奇怪な作爲によるものである。ではこのようなものが、識者によっていかに解釋されたであろうか。蓮永寺の日京上人が「記實」にもし誤謬がなかったならば、わが國佛教史上の一大發見といわなくてはならぬ。しかし、關わるところは甚だ大であるから須らく慎重に檢尋考査して事實の正確を期

さねばならぬ」と言っていることはすでに述べた如くである。昭和十二年九月に同寺で發行した「貞松山蓮永寺縁起」にも「行く／＼奥州地方を巡化し、海を渡って蝦夷地方に入り、更に樺太から滿洲へ行ったといはれ、最近、斷碑や口碑の發見研究に依れば、かなりの教績を擧げ、元の仁宗皇帝の歸依を得、晩年哥林カレンコムに至って寂したと言はれて居りますが、何れにしても明瞭な事實は判らず、終焉の場所および年月日等も知れて居りません」とあって慎重な態度をとっていることがわかる。

影山堯雄上人も「日持上人傳」の中で中里氏の説の大要をのべたのち、果して眞實かいなかが、學問的に立證される日の早く來ることを希望していると云われている。

しかし、高鍋日統僧正の如く、そのままに受入れた人も少くないようである。高鍋僧正の説はすでに前文に紹介したが、その昭和十七年に再版した「聖雄日持と豐太閤」なる書に「本書施本所」として「立正興亞道場Ⅱ張家口城内鼓樓北街廟」としてある。すでにそこから遠からぬ宣化の古塔から日持上人の遺物が持ち出され、ひそやかに北京の岩田氏のもとに集められつつあったとき、張家口の興亞道場では「日持上人はたしかに大元に入り蒙古に進みアルタイ山下に黄金國を建設された」というようなことを書いた冊子をひろめていたのである。

また昭和十二年に刊行された馬田行啓氏の「日蓮門下高僧列傳」の日持傳にも最も新しい調査として中里機庵の説をとり入れ、七十五六歳で唐努烏梁海の庫蘇古爾湖畔で雄大にしてまた豪壯な生涯を終ったとしている。

高鍋、馬田二氏の如き耆宿にしてなお中里説をそのままに受入れたのであるから、一般の讀者が迷うのは無理からぬことであろう。

次によく用いられる辭典類が日持の後半生をどのように扱っているかにつき、二三の例を擧げて見たい。大正元年刊の大日本人名辭書（經濟雜誌社）には「……石崎浦に至り、窃に蝦夷渡海の便宜を求む。蠣崎甚平なるもの法徳に歸依し進んで案内者となり、蝦夷海岸に小屋を造り、土人ムシヤタ兄弟來りて教化を受く。茲に四年間、農事漁業殖民の基を開き、ムシヤタを案内として樺太を経て滿洲に渡り、蠻勇の土人を教化して遂に異域の土と化すと云ふ。」

大正五年三月刊の日本百科大辭典には「永仁三年正月元日、法を弟子日教に付し、獨り寺を去りて後に朝鮮に赴きたりと云ふ。而して其消息を傳えず。故に今に其發足の日を以て忌日とす。」

前者は滿洲渡航説、後者は朝鮮説である。大正十一年刊の佛教大辭典（富山房）には「翌（永仁三）年正月朔日飄然として寺門を出づ。時に年四十六。遂に其終る所を知らず。一説によるに、行くゆく奥羽各地を巡化して石崎浦に到り、海を航して蝦夷に入り、土人を教化すること數年、更に彼を嚮導として遙に錫を樺太、滿洲に飛ばしたりと云ふ」とし、參考書目に北海道史稿をもあげているので恐らく岡本柳之助氏の説が考慮されたものであらう。

昭和八年刊の平凡社・大百科辭典には「永仁三年四十六歳の時、異域の布教を思ひ、飄然寺門を出で、正應四年陸奥石崎港より渡島國錢龜澤に渡り、留錫すること四年、更に樺太を経て韃靼に赴いたといはれている」とある。この説によると、永仁三年（一二九五）に出發したひとが、その五年前の正應四年（一二九一）に石崎港から蝦夷に渡ったといふので、そのようなことはあり得る筈もなく、新井白石の説をうけついで誤解であらう。

昭和十一年刊、望月信亨氏の佛教大辭典には「……孤影飄然として塞外弘教の途に上る。……乃ち奥羽を経て蝦夷に入り、過ぐる所法華の妙縁を結び、更に韃靼（或は北京）に航せりと云ふ。後遂に終る所を知らず云々」とある。

十二、宣化文書の検討

右の如く、従來は日持上人の大陸における事蹟を示す史料として、およそ信用に價するものは、諸家の努力にもかかわらず、斷簡零墨だにももたらされてはいない。宣化の立化寺から發見された諸々のものこそ、異郷における上人の遺品としてわれわれに示されたはじめてのものである。すでに述べた如き不思議な事情のもとに、偶然に發見されたのであるが、もしこれをしも見すごしてしまふならば、恐らくは日持の後半生は再び幽闇の淵に沈み、永久の謎として國史から消えさるに違いない。かの死海の古經卷の如き、洞窟内にちらばった羊皮紙の一斷片すら土砂の中から拾いあつめられ、丹念につきあわされて解讀の資料となりつつあると思ふとき、われらもまたこのような資料を最非とも正當に解釋したい。偽物ではないかと疑う人ももちろん少くないが、はじめ鏽びついた鍍金盒を手に入れたとき、賣る方も、買う方も、その中に三葉の文書が納めてあろうなどとは全く氣づかなかつたのであるし、日持という僧の存在なども、一般には忘れられていたのである。誰が、かかる忘却の底に沈んだ人物に關する文書を偽作し、これを盒におさめ、ぶあついほどに鏽をつけて、黙々として北京の東安市場の古物舗にさらしておくであろうか。これを手に入れた岩田氏にしても、實直な人物で、かつ繁榮する寫眞館を營んでいたのであり、日蓮信者でもないのである。ただ日蓮の肖像や御題目が出てきたので奇異の感をいだき、その出處を探索し、結局、宣化の立化寺からの盜掘品であることをさぐりあてたのであつた。昭和二十三年に故國へひきあげるとき、百方苦心してその一部を持ちかへしたのは、その品々の貴重さを考えたからで、その他の念慮はなかつたという。全部の品を並べても、まことに見ばえのしないもののみで單なる好事

家の目をひくようなものは一つとしてない。このような品々を誰が苦心して何を目的として偽作するであろうか。假に偽作するとして、日蓮の筆蹟から肖像、和臭をおびた日持の文章まで、一切をつくりうるものは到底中國人中には求め得ることは出来ないであろう。そうして見ると、誰か日本人にして、よく日持の事蹟を研究した人がつくったことにならざるであろうが、破綻百出する中里氏の「大陸踏破事蹟」くらいならば作り得るものがあるであろうが、この遺物ほどに天衣無縫ともいふべきものを誰人が、何のために偽造し、そのうちの一つのみを北京の市場に出しておき、他を宣化附近の民家にちらしておくであろうか。幸に邦人の手にわたったからこそ、このように問題になり得たが、もし無關心な中國人にも買われたならば、この文書などつまらぬものとして棄て去られたかも知れない。また百歩を譲ってかりにこれを偽物としたならば、よし岩田氏がその出處をさぐっても決して見つけ得なかったであろうし、同時に持出された品々が次々と十餘品も集る端著となるというようなことはあり得なかつたに違いない。

また更に百歩をゆずって、何人か華北在住の日本人で日持の事蹟に興味を抱き、その遺物を偽作したとしたならば、それはおそらく中里説によって絢爛たる活躍を示すものだったろうと思われる。中里説の如くはなやかなものが行われているとき、これよりもはるかに粗朴で動きのすくない日持上人の宣化終焉の事蹟などを想像し、それに關する二十數點の遺物を偽造して宣化附近のものに持たしめるなどということとは考え得ぬことである。

出土文書第三の表は、すでに述べた如く、日持上人自ら七字の題目をしるし、そのかたわらに駿河國松野の寺を門出する朝の抱負を托した詩を書きつけたものであるが、その裏面にもまた同じ人の筆で

星霜七歳一眠中 巡錫無涯西又東

日持上人の大陸渡航について（下）（前嶋信次）

鴻雁月啼何處去 願飛千里故山通

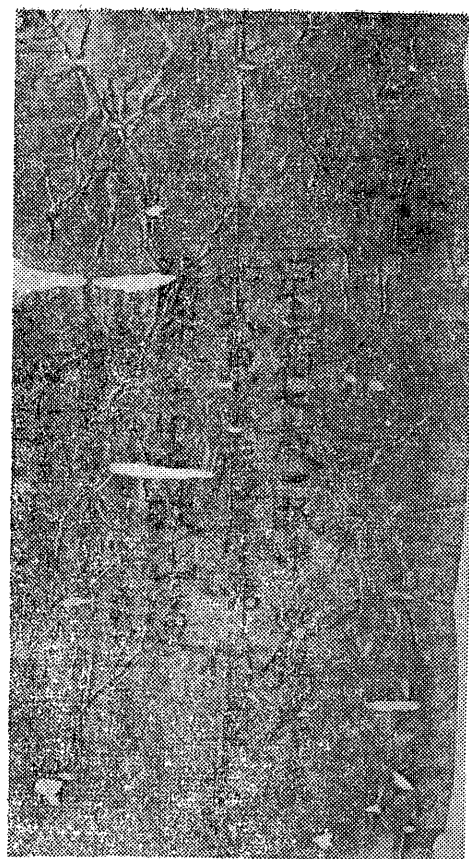
爲御聖師御題目並御遺影之表裝完

巡錫又七歲有感題詩

永仁辛丑穰九月沙門日持 花押

大元大德五年穰表裝於宣化城内

と書きつけてある。(第七圖參照)



第七圖 宣化文書 第三の裏

元の成宗の大德五年(一二三〇)の秋の作であるから、故里を出てまさに七年目にあたる。「星霜七歳一眠のうち」の一句のある所以である。ただし、わが國では、その四年前の一二九八年に伏見天皇が讓位され、十月には後宇多上皇の皇子邦治親王が即位された(後伏見天皇)。永仁の年號もその年、六年で終り、翌年四月二十五日には正安と改元された。元の大德五年は、わが正安三年にあたっている。日持が上谷の異郷にあって、月明の夜空を渡る雁の群をながめていたその年の九月には、すでに後伏見帝も讓位のものちで後二條天皇の御代となっていた。右の文書中で、日持が「永仁辛丑秋」としているのは故國との音信が全く杜絶え、政局の推移など知る由もなかったがためであ

ろう。「巡錫はてなし西また東、鴻雁月に啼いて何處にか去る。願くは千里を飛んで故山に至らん」。このとき彼は五十歳、まだ決して老境というような年ではなかったけれども、切々たる望郷の情をもらしている。その表に記された門出のときの詩が言葉通り黒痕したたるが如く、雄大な抱負を吐露しているのにたいし、裏面のものは、思いなしか氣魄を缺き、まぎれもない寂莫の情をただよわしているのである。

このころ日持は旅窓に病み、師日蓮の姿の夢枕に立つをまざまざと仰いだりし、こし方をかえり見ては涙にむせんでいたというのであるから、そのような心境が自ずと筆墨の間に映ずるのもことわりである。そのことは、前節にかかげた宣化出土文書の第二、日蓮の像をえがき、御聖師御遺影としたものの裏面に書きつけてある。(第八圖参照)これは三枚の文書のうちで、最も書きこみの多い面であり、それだけに問題とすべき點も豊富である。まず

現耶幻也孰最非

祖師從侍訪庭闈

病窓夢得廿年昔

慕淚潛々沾袖衣

題夢御祖師從侍於宣花城舍身招病

而臥床旬日間

永仁辛丑大徳五年癸九月十七日

沙門日持 花押

と向って右半分に記してある。「うつつかや、はたまぼろしか、いずれともわかたねど、師の君に従いまつりて、駿河なる松野の里にちははを訪ねまいらせしおのが姿をば見つ。とつくにのまちに病みふし、二十年のいにしえを夢み

日持上人の大陸渡航について(下) (前嶋信次)

ては、したわしき堪うべくもなく、涙はしとどながれ衣の袖をうるおせり」といつている。二十年の昔とは、あたかも師日蓮の晩年にあたる。庭闈は父母の意であるから、松野の生家の父母と解して見た。そうすると、詩の後書は「御祖師に従侍するを夢みしに題す。宣花城舎に於いて身に病を招きて臥床旬日の間」と讀んでよいかと思われる。この詩を書いたのは永仁辛丑・大徳五年秋九月十七日であるから、第三文書の裏に「星霜七歳一眠中」の詩を書き入れたのと同じ時と見るべきであろう。つまり第五圖で示した文書第一の裏の書き入れにある如く、麝香鹿の皮を求め得て、故國からたずさえてきた紀念の文書三枚を表装したのが、出發後七年目の大徳五年の秋のことで、これが終わったとき、それぞれその裏にこれらの書き入れをしたものと考えられる。更にこの第二文書の裏の向って左半分には

於宣花城契歸妙法之友人鄭老壽

八十五歲來舍而此御聖師之御姿凝觀問

沙門答申即寔日蓮御聖師之御象

彼鄭老也凝視一刻後拱手二拜三拜而

重曰似遼國之聖祖像矣？國現在滅亡而

現世爲改國稱亦我等爲此由惟遵守於大元

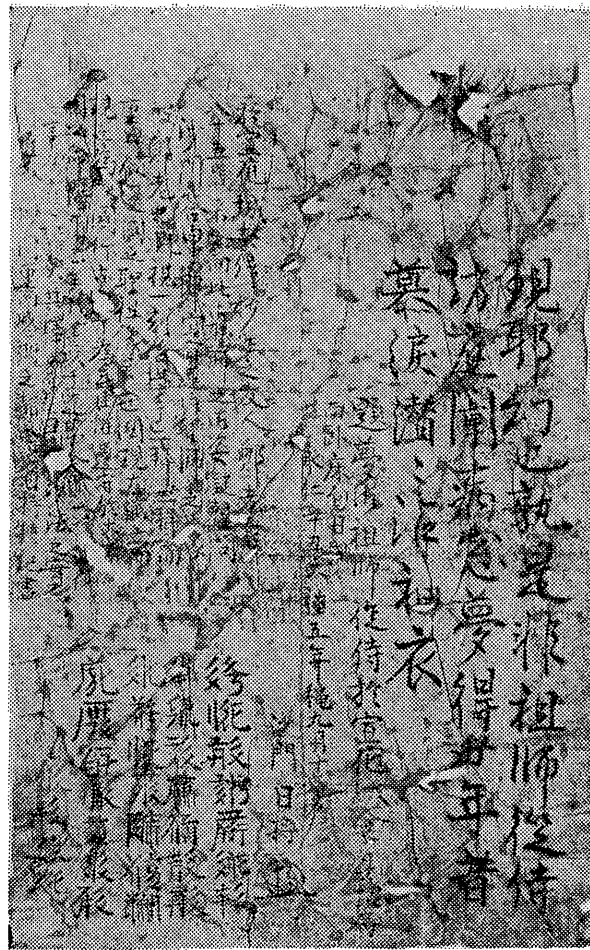
國之命灑爾已矣我書以于遼字今賦一詩

此言爲應諾矣其釋意是日蓮 妙法之實

行達成 沙門重而感謝之鄭老日持特記書

とし、その下に西夏文字で一行七字で四行の詩らしいものと、署名とが書き加えてある。右の文章にはよく解しかねる個所があるが、大體次のような意味であろう。

「宣化城において妙法に歸することをちぎった友人に鄭老がある。八十五歳になるが、ある日、庵を訪れ、この聖師の



第八圖 宣化文書第二の裏

御姿をじっとみていたのち「どなたにておわすか」と問うた。「これこそ、かねがね御話申している日蓮御聖師の像ぞや」と答え申せば、鄭老は、さらに凝視すること一刻ののち、拱手して二拜三拜し、重ねて言う。「遼國の聖祖の像に似ていられる。遼國はすでに滅び去り、今は國稱も改まった。われらもまたかかる次第にて、ひたすら大元國の命法にしたがっているのである。それにしてもわたしは遼の文字を書くことが出来るから、いま一詩を賦してここに書きいれさせて頂きたい』。この申出をこころよく應

諾した。この詩の意味は、日蓮の妙法の實行達成をちかたものであるという。わたくしは重ねて鄭老に感謝の意をのべた。」

ここに鄭老とあるのは、「八十八紀の老を祝するために敬しく日持師に贈る。」と刻して、大徳甲辰年二月十日に美し

日持上人の大陸渡航について（下）（前嶋信次）
（一五三） 一七

い鍍金の盒を贈った鄭日昌のことであろう。(本論文上、頁一三參照)。このひとは大徳五年に八十五歳だったといふのであるから、大徳甲辰(八年)には丁度米壽にあたっていたわけである。その生年は一二一七年で、宋の寧宗の嘉定十年、蒙古では成吉思汗の即位後十二年目、金の宣宗の興定元年にあたる。遼朝はすでに滅んで(一二二五年)から九十三年目である。鄭日昌老人の言葉のうち遼の遺民であるかの如き口吻も見えるが、時代の關係から少しずれがあるように思う。それにしても日蓮の像が、遼の聖祖に似ていると云ったというが、遼の皇帝ならば聖祖ではなく英主聖宗(在位九八三—一〇三一)のことであろう。聖宗の名はこの地方の人士にはなおかなりよく記憶されていたと思われる節がある。たとえば宣化の東南にあたる鷄鳴山はかつて唐の太宗が駐蹕し、夜間鷄鳴を聞いてかく命名したという形勝の地で、その上に立つ永寧寺は宣化府第一の名刹である。元の歐陽玄の鷄鳴山永寧寺記は元の順帝の至元四—五年(一三三八—三九)における重修の事情を記したもので、日持のかの地にいた頃よりやや後のものではあるが、その中に「山絶秀麗。寺あり、山の嶺にそばたつ。是を永寧となす。遼の聖宗の太平四年に建てらる……」としてある。聖宗のときに建てられたというだけのことであるが、乾隆宣化府志(卷三三)によると、統和六年(九八八)七月に遼主(聖宗)は「鹿を炭山に觀る」とあり、同じ年の八月には「黎園の温湯に幸す」ともある。^(一七)更に翌統和七年五月には「辛卯、桑乾河に獵す」とあるし、遼史本紀(卷十四)には統和二十二年六月壬辰「暑を炭山に清む」とあり、同年十一月には「辛亥、漁を桑乾河に觀る」とある。黎園の温湯も炭山もともに今の宣化からさして遠くない所にある。^(一八)聖宗とこの地方とはかなり縁があったことがわかる。聖宗の肖像が後世の人々にまで親まれていたかどうかはよくわからないが、遼時代にはその南京(今の北京)の皇城内に景宗聖宗の御容殿があった^(一九)そうである。また聖宗の時代には、父景宗の石

像を各地に建てたらしく、遼史本紀によれば（卷十三）統和十二年四月のこととして「戊戌、景宗の石像成るを以って延壽寺に幸し、僧に飯す」、同十三年九月にかけて「丁卯、景宗及び皇太后の石像を延芳淀に奉安す」、同十四年十一月にかけて「乙酉、景宗及び太后の石像を乾州に奉安す」などとしてある。同様にして聖宗の像が立てられたかどうかはわからぬけれども、大きな治績を残した人であったから、その畫像や彫像などかなり多く造られたものではないかと想像される。

右のようなわけで宣德府城に住んでいた鄭という老人が、日蓮の像を見て、遼の聖宗と比較したというならば、随分あり得ることと思われる。しかし、遼が滅び去って、國稱があらたまり、現在は大元國の命に従っているというのでは、一一二五年に遼が滅んでから、一一一三年に成吉思汗が宣德府を占領するまでの期間をこの地域を支配していた金朝のことが全く無視されることになる。かつまた鄭老人は遼の文字を解すると云って、それで七言の詩を書きつけたのであるが、これはいうまでもなく契丹文字ではなくて、西夏文字である。鄭老人が西夏の遺民であつて、ここに遼とあるのが西夏のことならば、この國が蒙古軍に滅ぼされたのは一二二七年で鄭日昌の十一歳のときにあたるからよく事情が符合してくる。それにしても西夏の聖祖とは誰を指すのであるか、太祖李繼遷以來はつきりとそう呼ばれている君主は見當らない。また假にこれが大夏（西夏）のことであるとして、何故に日持は遼と書いているのか、私には解しかねる。しかし、西夏文字を遼の文字と呼んでいることは明白なので、遼國とあるのもまた西夏であろうと解するのが妥當であろう。この文章の如きも和臭にとんだものであるが、すでにかの地で數年間を送っていたに違いないから、かなりよくその言葉にも通じていたと見てよいかと思う。鄭老人が何か特別の理由のためことさらに西夏のことを遼と稱した

ものであるか、この邊の解釋は目下のところ、筆者にはつきかねている。

西夏文といえ、岩田氏將來の日持の遺品中に西夏の經典の一部がある。京都大學の西田龍雄氏の研究によれば「大方廣佛華嚴經」八十卷中の第四十一卷十定品二十七の二の最後に近い部分であつて、その右端に佛畫を貼付し、餘白に朱墨をもつて

南無妙法蓮華經

依教發心常日持之而祈念宿業

罪因願乃皆消滅然而見世速

登正覺 譯文冊壹千八拾部發刊

戊戌正月拾六日頒與

宣府沙門 日持控手 花押

と書き、上方に西夏文字の印がおしてある。この印は羅福萇の「西夏國書略説」にもあげてあり「正徳二年」と讀まれる。これは西夏の崇宗李乾順の年號で西曆一二二八年にあたっている。

「南無妙法蓮華經

教えによりて發心し、常日これを持って祈念したならば、宿業罪因も願くばすなわちみな消滅し、しかして現世において速かに正覺に登るであろう。譯文冊一千八十部を發刊し、戊戌の年（大徳二、西曆一二九八年）正月十六日に頒與した」と云っている。（第九圖参照）

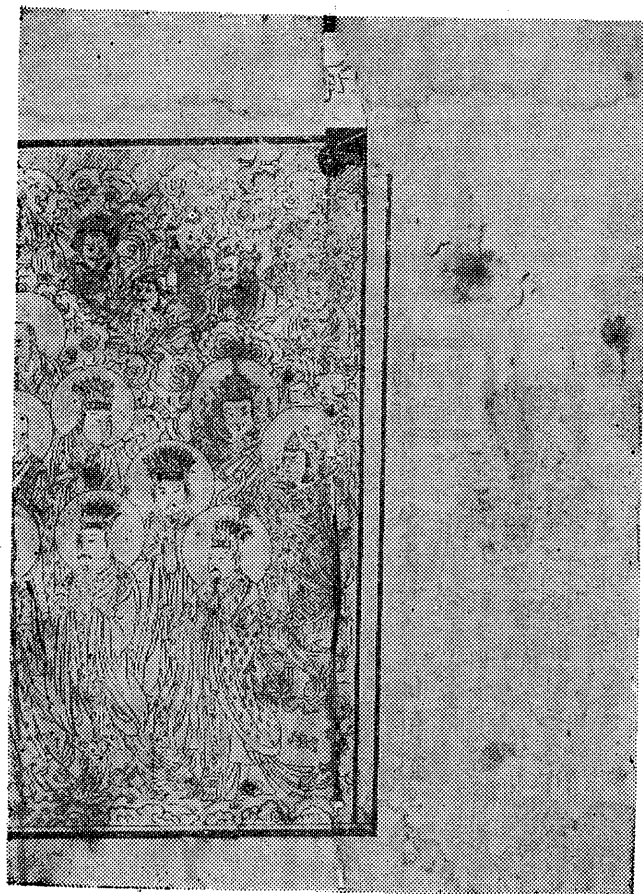
また經文の左端には位牌の圖を貼付し、その中に同じく朱墨で

法華寺安國堂

大德二年正月十日

弘通日持合掌

と書き入れてある。(第十一圖参照)(第十圖と十一圖との間に經文が十八行あるが寫眞には入れてない)



第九圖 西夏文經典の一(右端)

この經文については京大人文科學研究所の藤枝晃教授や、西田龍雄氏からいろいろの御注意を頂いた。それについては後文で述べるつもりであるが、この經文の前後の書きこみの筆蹟は、他の文書にある日持のものと全く同じである。そして大德二年正月十六日とあるのは、これら遺物中で最も年代の古いもので、永仁三年元旦に駿河を出てから僅に滿三年と半カ月の後である。

第六節にも述べた如く、北海道渡島地方で四、五年の間土人の教化をした後に大陸に渡ったというのが彼地の通説の如くなっているが、この八月、同學の和田博徳講師から來信があり、札幌から「北海道地方史研究」と

日持上人の大陸渡航について(下)(前嶋信次)

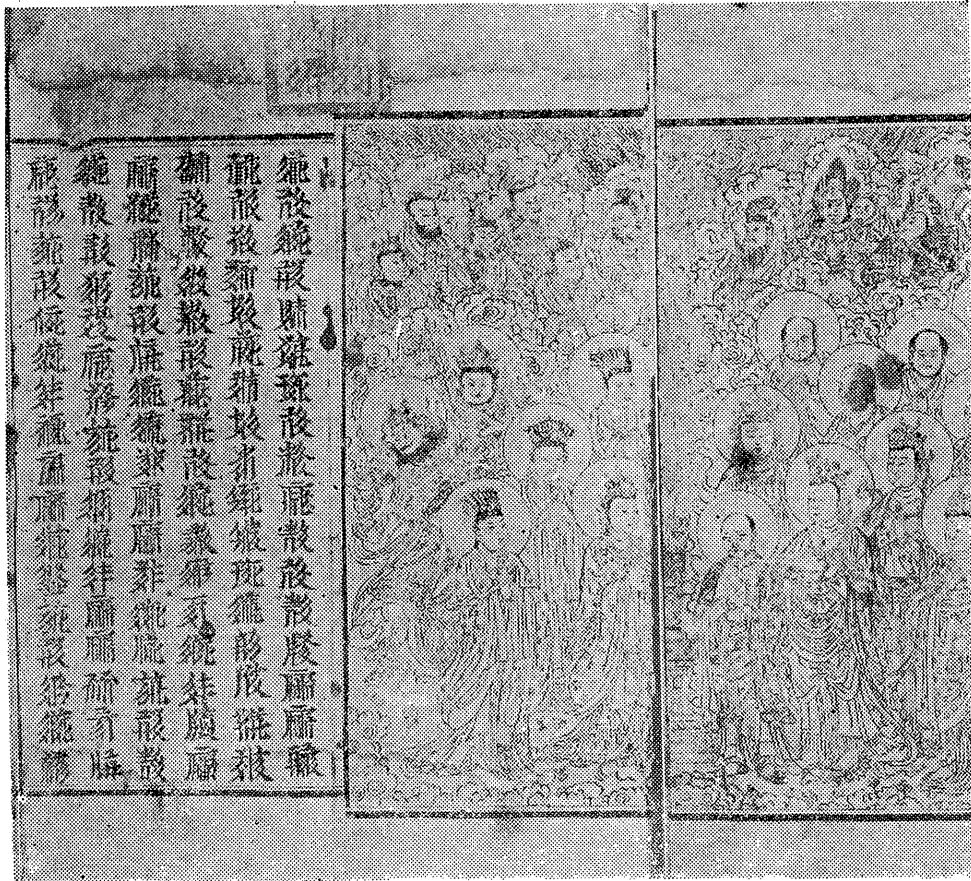


いう雑誌が出ていて、本年四月発行の第二十三號に、須藤隆仙師の「日持上人に就て」という論文が載っている旨を教えられた。國會圖書館に赴いてこれを見たところ中々面白いものであった。筆者の未知の事項と、須藤師の結論を簡単に述べて見よう。

一、河野常吉氏編「函館區史」(明治四四年七月十五日、同區役所發行)には日持が奥羽を経て函館に渡ったのは永仁四年五月で、今の石崎村に菴を結び、居ること四年の後、滿洲に渡ったとある。

二、石崎村妙應寺の經石塚の碑文(文化十四年一七八一—安積信撰文)には駿河より直ちに漢土にわたり、晩年松前に來て錫を留めた云々とある。

三、同じ經石塚のもう一つの碑文は寛保二年(一七四二)のもので日持は異域教化の後宇賀島で入滅したと記している。(宇賀島がどこかはよくわからぬが石崎とする者もある。)



第十圖 西夏文經典の三

四、錢龜澤黒岩岬の岩屋の内、東方から三間、高さ六尺の處に縦二尺五寸、横一尺ほど横にやや窪んだ平面がある。ここに傳説によれば日持が題目をしるしたとい、現在も海水をそそぐと南無妙の三字を讀むことが出来るが、字の大きさは徑凡そ一寸五分である。また岩崖に題目が三カ所あったが、そのうち二カ所は崩壞してなくなった。(大正十二年、道廳編、北海道名勝天然記念物調査報告)

五、白石遺文のうち「問日持上人事蹟書」によれば正應四年正月に松前から北高麗に行き寺を建て、持統山博傳寺と云ったとある。

六、安政年間の蝦夷實地檢考録によれば、石崎を日持終焉の地としている。

その他種々の所傳をあげているが、それらは本論文にもすでに引用したものである。須藤師のこれらに對する批判は、宣化の遺物などは全く見ていられないのである



第十一圖西夏文經典の四（左端）

的だからであり、地理的にも津輕石崎から海峽を北に向う場合、函館よりも龜田石崎へ至った方が便利のように見うけられる」。(同書頁五)

これにはわたくしも全く同感である。

二、永仁四年五月渡道説には何の矛盾もない。むしろ丁度理にあった年次のようである。(頁六)

富士川畔の松野から、渡島の石崎まで一年半というのは永すぎると思う。最初から大陸渡航の決意なのであるから、途中を急ぐはずである。もし傳説を根據とするならば永仁三年六月一日渡道説の方が實際に近いであろう。この點は須藤師に同意することが出来る

が、きわめて妥當と思われる。その大略は

一、深瀬春一氏は「蝦夷地における和人傳説考」(昭和十一年刊)中で、今の石崎村の妙應寺(もとの經石庵)のある地はもとアイヌ語でシララエトとよび「岩の崎」を意味し、これを釋化して和人が石崎と稱するに至ったと信ぜられている以上、後世の法華僧が津輕石崎に行われていた説話を假借したのではないかと述べている。しかし日持上人はやはり北海道の「石崎へ上陸したと見た方が無理が少ないように思われる。遺跡と稱されるものも多いし、傳説も函館の夜泣石に比して石崎の方が合理

い。同師もまた「永仁四年五月に日持が函館に渡つたとする根據は別にないらしい」(頁三)と記している。明治四十二年に木村成明氏が書いた「函館山鷄冠石之由來」に永仁四年五月説が記してあるという。

三、函館夜泣石の傳説、黒石岬の傳説ともに信憑性のあるものではない。後者の如きすでに深瀬氏の云つた如く貝殻の附著した痕跡が文字に見えるにすぎなからう。

四、蝦法華から大陸に向つて船出したとの傳説、これは「飛んでもない附會説である」トトホツケはアイヌ語のツウホウキ(岬の蔭)またはトーボケ(岬下又は岬蔭)であろうと蝦夷地名解、北海道蝦夷語地名解などにあり、別に「藪地」の義ではないかといわれ、「アイヌ地名考」にトトは藪の義とある。たまたま法華とあるところから日持に附會したのである。(頁六一七)

この説にも同感である。わたくしも大陸に渡るに逆に東行することはあるまいと思う。白石遺文に松前から船出したとあるのは、根據の如何にかかわらず、まさにありそうな事と思われる。

五、駿河からまず漢土にわたり、そこから北海道に渡つて死んだとする説は信じられない。「晩年蝦夷地に住んだとすれば、何かそれに因んだ傳説があつてもよいはずである。全くない所を見ると、やはり大陸へ渡つて行方不明というのが本當ではなからうか。市川十郎は蝦夷實地檢考録で、石崎が終焉の地であろうといっているが、これだけの高僧が晩年を石崎で過したとすれば、もっと晩年に相應しい傳説が生れている筈である。晩年はやはり大陸で終つたのである。う。」とにかく、總體的に見て晩年の傳説に乏しいのであるから、日本内地でなく、やはり外地で終つたと見るのが穩當ではなからうか。」(頁七)

これにもまた同感である。宣化こそその終焉の地とすべきものと思う。

六、大陸渡航の年次については、妙應寺縁起（明治四〇年）は正安元年（一二九九）とし、「函館山鷄冠石の由來」は永仁七年六月一日とし、白石遺文は正應四年（一二九一）としている。正應四年は日持がまだ駿河にいたところで問題にならず、永仁七年はその四月に正安と改元されている。「唯そう長く本道に滞留したような傳説が一つも生れていない所を見ると、『數年間在住』と見る河野氏説（函館區史）に信を置いてよいであろう。」（頁八）

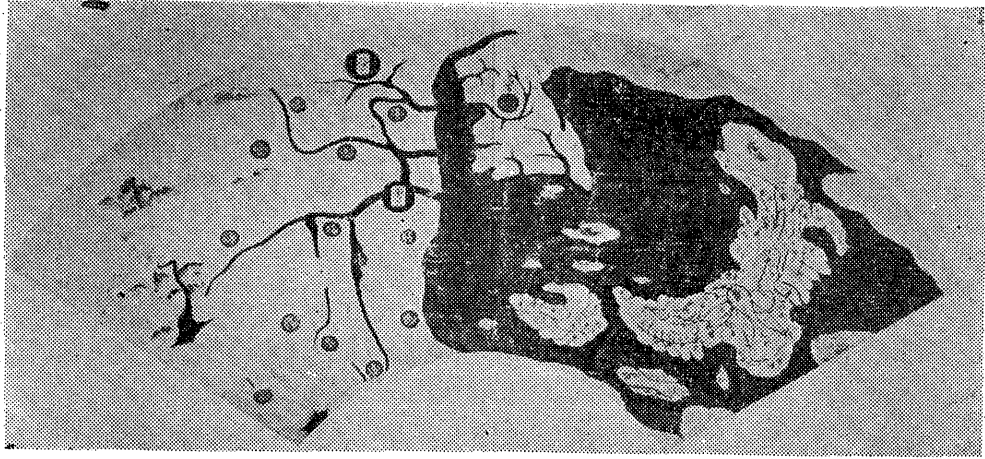
鋭い史眼といわなくてはならぬ。ただし、日持上人の蝦夷滞在をわたくしはせいぜい一年以内と見ていることは後文の如くである。更に須藤氏は北海道にある日持關係の諸寺について批判されている。前文にのべた外、上人を勸請開山とする福島妙蓮寺（明治二十九年創立）幌泉の大法寺（昭和二年創立）もあるとのことである。そして最後に

「總合して見ると確かに本道へ渡ったということは否定できないであろうが、その事實の詳細に就ては信ずべきものが少なく、従つて渡道事實を具體的に開陳することは困難である。」「その渡道を否定的に見る史家もあるが、否定する條件もまたない。」「とにかく日持の渡道が事實であるとすれば、北海道へ渡った最初の高僧ということになる。」（頁十）

二）柿花啓正氏も石崎を出發し、大陸に向つたのが後伏見天皇の正安元年（元の大徳三年、一二九九）六月一日であつたとしている。しかし、宣化發見の西夏文經典の書き入れでは、すでにその前年の正月には、かの地に「法華寺安國堂」なるものを構えて、一千八十部の經文を發刊して衆に頒っているのであるから、少くもその前年の大徳元年（わが朝の永仁五年）中には今の宣化に到着したものと見なければならぬ。岩田翁の談によると、北京で蒐集した日持關係の遺物中に高さ一尺ほどの日蓮の尊容を寫した石像（本論文上、頁三四に木像と記したのは誤解であつたから、ここに訂正する）があつて「永仁五年冬刻」と刻してあつたという。高さ一尺程の石像を負つて長途の旅をすることは一寸考え

られないから、これは恐らく今の宣化に落着いてから造ったものに違いない。して見ると大徳元（永仁五）年の冬には少くとも彼の地に居たのである。そうすると、渡島地方滞在の期間は従來の所傳よりもよほど短かかったとしなければならぬ。假に所傳の如く、松野村を出發後五カ月で、六月はじめにかの地に着いたとして、せいぜい一カ年間ほどしか滞留する暇はないことになる。

ではどういふ經路によって今の宣化に達したのであろうか。なによりも、大陸に入ろうとするに、何故にまず陸奥に到ったのであろうか。これらに對する解答は推察によるほかはない。北路を選んだ理由の一つとして、私はそれを渡るべき海が比較的狭いと考へたがためではないかと想像する。當時の邦人の地理知識については論議の餘地が多いであろうが、もっと時代を下って有名な豊臣秀吉の扇面地圖(二二〇)などを見ると陸奥の北方に狭い海をへだててエゾがあり、しかもそのエゾはすでに大陸の一部で高麗と地續きになっている。(第十三圖參照)このようにエゾが大陸に入っているのは利瑪竇の坤輿圖と一致することであるが、藤田元春氏によればこれは當時の世界では最新かつ最正確に近い東亞輿地圖であったといつて過言でないといふ。(二二一)しかもなおこの程度とすれば、更に三百年近くもさかのぼった日持時代の知識はさらに劣るとも、すぐれていたとは云い得ないであろうと思う。一六一三年にリチャード・コックスからロンドンの印度事務省へあてウイリヤム・アダムス（三浦按針）のことについて報告した文書中で「蝦夷島とは既に交通あり、該島は韃靼大陸の一部なりといふ」とあるとのことである。またウイリヤム・アダムス自身の作った圖が一七〇〇年に刊行されたが、やはり大陸は津輕海峽の北方に延びて Terra de Iesso としるしてある。さらにエゾが大陸の一部であるという考へ方は貞享四年（一六八五）の本朝圖鑑綱目、元祿二年（一六八九）の本朝圖鑑綱目にも残っているとのことである。



第十三圖 豊臣秀吉の扇面地圖

藤田元春「日本地理學史」に所載、武藤山治氏所藏としてある。

あり、北海島や千島や樺太が正しく知られたのは寛政以後のことであつた。^(一三三)
もちろん容易な行路とは考えなかつたに違いないが、それにしてもみちのくのはてから、しばらく風濤ていを冒せば直ちに大陸の一端に到着するものと期待しの險たのではなからうか。

藤田元春氏の日本地理學史にも朝鮮總督府博物館に所藏されていた「倭虜國圖」が紹介してある。^(一三三) 陸奥のさきに蝦夷地をつづけ、上下の餘白に「八道六十六州六百三十郡東起陸奥、西極肥前……」ではじまるかなり長文の書き入れがあつて、その末の方に

地接蝦夷、廣漠無際……則其人長大身有毛、倭稱蝦夷。即我國野人之地、多産文魚貂等物。倭言自陸奥、直到我國之東北道、途中至而近、而北海風高疑不敢度云爾。

とある。藤田氏はこの註記は「天文以後恐らく文祿元和以後のものであると考えしめる」としているが、それにしても「日本人の言う所では陸奥から朝鮮の東北道に到るには、途中が至って近い。しかし北海は風が強いから、きらってあえて渡ろうとしないだけである」とある點は面白い。恐らくは渡島地方のアイヌ族は日持上人の時代に大陸へ往來していたもので、上人はその便を利用して朝鮮の

東北部か沿海州のどこかに渡ったものではあるまいか。それが何年何月ころのことで、どういう経路で今の宣化に到着したことになったか、考うべき手がかりはないけれども、永仁三年元旦に駿河を出發してから三年目の永仁五年冬にはすでにかの地に居たと見得ることは前述したごとくである。何故に今の宣化を布教の地として選んだのか、機縁のあやしさによるとでもいう外ないが、或は上都開平から大都に向う途中、當時の宣德府城、今の宣化において、その説く所に耳を傾け、その人柄に惹かれて敬愛を献げる一群の人々と結ばれ、それらの援護のもとに堂をかまえて住みついたのでないかと想像する。しかし上都開平の方から来たというのも別にしかとした根拠はない。道光の重修碑の文句から推した假説にすぎないのである。(二三四)

十三、西夏文經典について

ここで一つの難問題に逢著する。それは前文でも述べた如く京大の藤枝、西田の諸氏からこの西夏文經典にとって、極めて重要なしかし不利な御注意を頂いたことである。西夏文の「大方廣佛華嚴經」四十一卷は石版刷のものが、かなり多數流布していて、現に京大東洋史研究室、天理圖書館などにあり、石濱純太郎、藤枝晃の二氏も所藏されている由で、岩田氏將來のものも、西田氏の説によると、それと同じものである可能性が極めて大きくなったという。藤枝氏は日持の書き入れのある經文にも強い疑問を抱かれた如く、このような問題のある品(西夏經文)は一先ず、他の遺品とは切りはなすべきであって、他の文書とは日持の筆蹟・墨色などもことなっている點を明かにしないと、他の文書まで偽物と見なければならぬおそれがあるというように考えていられるらしい。同氏が疑問を深められたもう一つの理由は

この經文の書き入れに「宣府沙門日持」とある點であり、宣德府を宣府と改稱したのは明の洪武三年であつて、元代に宣府と稱した例はないというのである。もつとも、經文が石版刷と見とめられる以上は、このような穿鑿さえもがすでに不必要で、ごく新しい偽造物にすぎぬ……とこのような見解をとられていたことである。もつとも、このような意見を示されたのは、まだ宣化出土のものゝ寫眞によつて比較されていたところのことであつた。石版刷かどうかの問題はあとにまわし「宣府」という地名についていふと、確かに藤枝氏の指摘された通りである。目下の所では元人が宣德府を宣府とよんだ實例をここに擧げることには出來ない。元史地理志(卷五八)には順寧府の條下に「唐に武州となし、遼に德州となし、金に宣德州となす。元初に宣寧府となせしも、太宗の七年(一二三五)に山東路總管府と改む。中統四年(一二六三)宣德府と改め、仍ち上都路に隸せしむ。至元三年(順宗の至元三年—一三三七)地震するを以て順寧府と改む」とある。グロータース Willem A. Groeters 神父も筆者のためにその所藏される嘉靖二十八年の兩鎮三關通志(卷二)を調べられ「中統四年八月、元、宣德を改めて府と爲す」とある一條や、乾隆二十三年の口北口三廳志(卷二〇)に「中統四年八月陞宣德州爲宣德府」とある條などを教示された。

日持のいたところ「宣德府」とよばれていたことは明かである。なおこれより先、長春真人は西域に赴くまゝに一二二〇年(成吉思汗の即位後十五年)八月からこの地に滞在したことがあつた。西遊記を見ると「初めて宣德州元師移刺公の請に應じ、遂に朝玄觀に居る」とある。當時は宣德州と呼ばれていたようだが、別に宣德路ともいわれていたらしい。その根據は、右の元師移刺公は耶律禿花のことであるが、宋子貞の「中書令耶律公神道碑」には「宣德路長官太傅禿花が官糧萬餘石を失陷し云々」と見えるし、^(二二六)同じ碑文中に「乃ち十路を立てて課稅す。設くる所の使副二員はみな儒

者を以てこれたらしむ。燕京の陳時可、宣徳路の劉中の如きは皆天下の選たり云々(一三七)などともあることなどである。なお長春真人は三年後に西域から歸ったときも宣徳元師移刺公に迎えられ、州の朝玄觀に滞在した。グロータース師によれば、朝玄觀の遺跡は現在にはほとんど見るかげもないものとなっている由である。

次に世祖の中統二年(一二六一)三月に燕京から上都に赴く途中、ここを通過した王渾は

三月辛未午刻、入宣徳州

とその日記(中堂事記上)にしるしている(一二八)。これから二年して宣徳府とあらためられたのであるが、マルコ・ポーロなどは明かに改名後にここを訪れたのに Sindaciu (宣徳州)と呼んでいる。しかし一般にはやはり府と呼ばれたのである。その用例の一二を挙げよう。世祖の至元十七年(一二八〇)正月の虚仙飛泉觀碑(河北省蔚縣)のうち「宣徳府」としてあるし、更に時代が下って、虞集の「句容郡王世績碑」には句容郡王「土土哈」が大徳元年(一二九七)二月に「宣徳府に至りて薨ず。年六十一」としてある(一二九)。大徳元年といえば、筆者の意見では、前述した如く、日持が宣化に居を定めた年なのである(一三〇)。

明代になって宣府と改められたことは藤枝氏の指摘された如くである。嘉靖四十一年の「宣府鎮志」(東洋文庫藏)にも「洪武三年(一三七〇)平章湯和に命じ宣徳をとらしめ……。宣徳を名づけて宣府という」とあって、その下に説明を加え「因宣徳府舊名稱之、實非府也」としている。讀史方輿紀要(卷十八)によると「明洪武四年府廢さる。詔して盡く其民を居庸關内に徙し、遂にその地を虚くす」とある。ながらく宣徳府(順宗のときから順寧府)とよばれてきたのであるが、いまや府は廢止された。しかし舊名によって「宣府」と稱したのである。この明代の「宣府」と日

持の用いた「宣府」とは實は意味をことにするものと思う。わたくしはすでに元代から宣德府を略して「宣府」と呼ぶことも行われていたものと考え。グロータース神父も同じ考をもらしていられた。桑原隲藏博士は「イブン・コルダードーに見えたる支那の貿易港」と題する論文中で、福建の泉州を泉州府と稱した實例は見出し得ぬけれども、泉州刺史府を約して泉州府と稱し得べきことに就いては格別疑惑を要せぬと思うと述べられ、その次にフランスのポール・ペリオが唐時代に廣州を廣府と稱した所以を説明して次の如く述べているとし、ペリオの文章を譯出している。⁽¹¹¹⁾

「廣州は正しくは廣州府即ち “*Préfecture de Kouang-tcheou*” と稱すべきである。古代のアラブ旅行家がカントンを *Khanfu* と稱せし所以は吾が輩の知れる限りに於て未だ十分に解釋されて居らぬ。吾が輩はこの *Khanfu* は廣州府を略した廣府の音譯と認むべきものと信ず。實際支那人はかゝる省略の名稱を慣用する。保定府を保府〔宣化府を宣府〕と稱するが如きその一例と思ふ。廣州府を略して廣府と稱する實例は、『大唐求法高僧傳』『大唐貞元釋教錄』等に散見して居る。(B. F. F. E. O., 1904, p. 215)」

また明代の正しい呼稱は「宣府鎮」であつた。宣府鎮志(卷十一)に「宣府鎮城はもと元の宣德府城なり」とある如く、今の宣化の町は明代には正確には宣府鎮城と呼ばれ、略して宣鎮ともいわれた。

ついでながら「宣化府」と改めたのは清朝になってからで、康熙三十一年に「宣府鎮を以って宣化府となし、倚郭を宣化縣と爲す」とある。しかし「宣化」という名は決してこのときに始めて現われたのではなく嘉靖の宣府鎮志(卷一)によると金の世宗の大定七年(一一六七)に「金、歸化州を改めて宣化州となす。領縣は宣德、倚郭は今の鎮城」とある。歸化州とは契丹(遼)時代の地名である。顧祖禹の讀史方輿紀要(卷十八)には契丹は更に歸化州を德州に改めて

いたが「金の天眷初めに宣徳州と改めて大同府に屬せしめ、大定七年にまた改めて宣化州となし、明年また宣徳州という」とある。期間は短かくとも金代にすでに宣化という名が用いられたのである。明朝の宣宗の宣徳二年（一四二七）に宣府鎮城の西北隅に建てられた倉庫は「宣化倉」と命名された。東北隅の宣徳倉（洪武二十六年建造）と鐘樓の東の宣政倉（永樂二年建造）とならんで三倉の一つであつた。^(一三三)これは宣化という名が明代において、倉庫名として復活したことを示している。

日持關係の宣化文書には「宣化」という地名が四カ所に出ている。文書第一の裏に「上谷の宣化に於いて麝香鹿の皮を售うを得て」とある。（本論文上）頁三二に宣花と讀んだのは、たまたま鹿皮にしみがついていたために誤讀したので、精査すると宣化としてある。また第二文書の裏にも「於宣化城舍」「於宣化城契歸妙法之友人」と二カ所に出ており、第三文書の裏にも「大徳五年秋表裝於宣化城内」としてある。これは何と讀むべきであらうか。「宣徳」と讀み得るならば最も適切なのであるが、「徳」の字は「大徳」という年號の場合に用いてあって、このようには書いてない。「宣府」ではないかとも思われるが、西夏經文に「宣府沙門」とあるのと比較するとやはりちがっている。「宣府」か「宣徳」かどちらかにあたると考えるほかないが、特別の書き方なので目下のところ判定がつかないことを遺憾とする。

十四、輔仁大學調査團の立化寺訪問

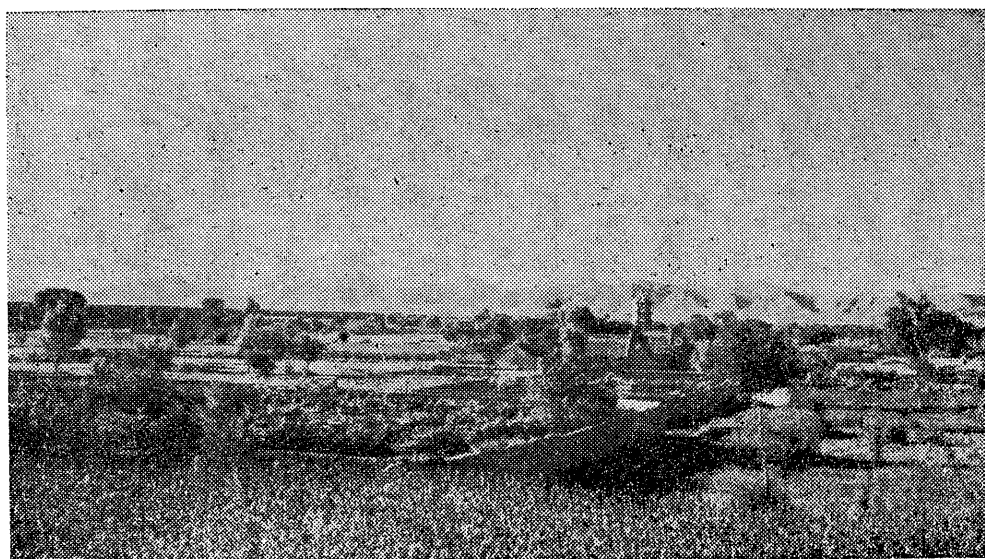
藤枝教授からはかねてこの問題についていろいろの教示を仰いで來たが、今夏（八月三十日）上京されたとき、文京區追分町の西教寺でお目にかかり、同氏所藏の西夏文華嚴經第四十一卷と宣化出土のものとを照合することが出來た。

その際、藤枝氏の學友ウィレム・グロータース師も見え、岩田秀則氏も將來の宣化出土の遺物全部をもって來訪された。偶然、早大の松田（壽男）教授も來あわされたので、まことに興味津々たる一夕をすごすことが出來た。グロータース師はベルギーの人で、カトリック教淳心會に屬し、永年北京に在住され、主として言語學上の研究に従われた。その業績は高く評價されているが、別に民間信仰に關する論文も多くあるようである。昭和二十三年八月、輔仁大學調査團をひきい、宣化地方の方言調査を行われた。宣化近郊の寺廟については一九五一年に *Rural temples around Hsüan-hua (South Chahar), their iconography and their history* という著があつて *Folklore Studies* (Vol. X. n. 1) に發表されている。これは本文二一六頁に七六二葉の寫眞と地圖八葉とをそえたもので、三六一カ所の寺廟について調査したものである。なお宣化市内の二二〇寺廟についても調査されたが、これはまだ發表されていない。中國の内戦によって日本にひきあげ、現在は世田谷區松原町に住んで、わが國の方言研究に没頭されているため遅れているのかと思われる。

宣化の立化寺の現状はどうであろうか。同學の村松暎氏が昨三十一年に北京に旅行されたとき、調査を依頼した。村松氏もいろいろ盡力してくだされたが、遂に同地に赴く許可が下りなかったとのことである。それでこの度、藤枝氏の芳志によりグロータース師に會うことが出來たのは、まことに望外の喜びであった。以下に同師の御厚意により、その調査された結果をかかげさせて頂く。前記の如く、昭和二十三年八月のことで、師は二名の中國人學生とここを訪れたのである。

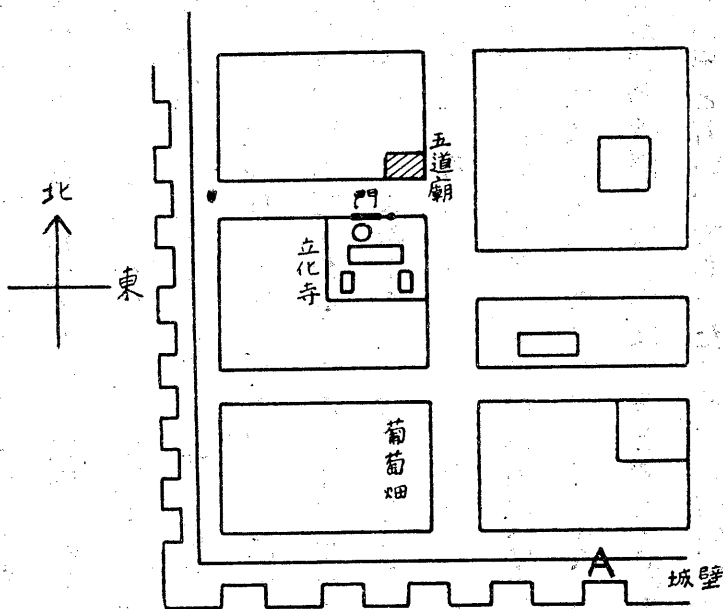
——まず立化寺は宣化城の西南隅の塔兒寺街にある。(本論文(中)、頁四に乾隆宣化府志の卷頭の附圖に塔と寺を

書き塔兒寺としているが、塔兒街または塔兒寺街の名はこれからきたものであろう。ただし、これは立化寺とは別の寺であるかもしれぬと記しておいた。しかし、これは筆者の誤りで、塔兒寺とは立化寺の俗名であり、そのあたりに他に塔のある寺はない。街の名もまた當然これから出たものである。現在、宣化城内には二二〇の寺廟があるが、康熙の宣化縣志の附圖には、その三分の一位しかのせてなく、しかも立化寺ははっきりとのせてあるから、主要な寺廟の一つとしてあつかわれていたことがわかるとグロートゥース師はいう。ここに載せた寫眞(第十四圖)は同師の撮影したものであり、下圖もまた調査の際作製された宣化全圖から、わたくしが塔兒寺街の部分のみを寫したもので、南方の城壁の上、大體Aの地點からカメラを向けたのであろう。立化寺の寫眞は岩田氏も持っていたが、歸國の際の混亂で紛失された由である。ここにグロートゥース師が未発表の資料中からかかる珍重すべき寫眞を提供して下さったことを深く感謝したい。手前の圍いの中は葡萄園で、一つの井戸に四株づつ植えこみ、圓形に樹を仕立てるとのことである。前文(本論文(中)頁三)に陳増敏の「宣化盆地」をひき、城内で葡萄を産するのは、そのほぼ中央にある鐘樓以北のみであると記したが、この寫眞で見ると、西南隅の塔兒寺街でもこのように栽培されているのである。また前面の山脈は蒙疆につらなるものである。グロートゥース師の實地調査によると、立化寺の境内をめぐって壁があり、門は北方にある。この門の樓上に小型の彌勒佛像があつて南面して佛殿に向いている。佛殿の南方には東西に相對する二つの建物があり、東側のものには菩提達磨の像を安置し、西側のものには立化祖師の像を祀っており、後者に住持の僧が一人いた。正面の佛殿には三大像が東西にならんでいた。西側が地藏菩薩で、脇立は目連と老人である。中央は釋迦如來で、脇立は迦葉と阿難である。東側は觀音菩薩で、脇立は若い男と若い女であった。前方(南側)に机があり、多くの位牌がならんでいた。



第十四圖

南方城壁上から立化寺をのぞむ。
 (昭和二十三年八月、輔仁大學調査團グロ
 ータース師撮影。)



(一七三) 三六

が、龍王のものが六枚、胡都神(または胡毒神)のものが一枚、井神のものが三枚、立化祖師のものが一枚であった。また佛殿の左右の壁には壁畫があり、右に九人、左に九人、都合十八人の阿羅漢をえがいてあった。佛殿の前庭(南)には大香爐があり、雍正十三年の作製である旨が記してあった。その近くに破壊された石碑が地面にころがしてあった。これは一九三三年(昭和八)に龐炳助 P'ang Ping-hsun を首魁とする土匪がこの寺を襲ったときのしわざとのことである。

グロートース師は右の斷碑により、萬曆四十五年(一六一七)という文字や「佛殿の前に三間の建物を立化祖師

のために建てた」というような部分を判讀した。境内にはまた光緒十三年の碑もあって、同じく破壊されていた。別に二五〇斤の釣鐘があつた。銘文によると乾隆元年の鑄造で「立化寺のために募金してつくった」旨も記してあり。鑄人は胡廷寶、岳峻である。

立化寺の門前に道路をへだててある小廟、つまり、寺の北方にあるささやかな廟は五道廟で、向って左に土地神、中央に五道神、右に山神の像を安置してあつた。五道廟は宣化市中のみで六十五所もあり、河北での土地廟を察哈爾地方ではかく呼ぶのであるから、格別に立化寺とは關係のないものであるとのことである。

グロース師から教えられたことは右の如くであるが、この中には誠に重要で、かつ興味深い事項が含まれている。前記の如く、はじめ中村某が北京の東安市場でさびついた鍍金盒を入手し、岩田翁のもとに持参したのは昭和十一年正月であつた。龐炳助の土匪群が、何故か立化寺を襲つて破壊を加えたのは昭和八年とのことであるから、おそらく、遺物が盗み出されたのもこの際のことだと思われる。遺物の納められていたのは、佛殿の後方の塔であつたといふ噂である。この土匪團は寺に對して破壊を加え、萬曆四十五年の碑まで破壊したのであるが、この碑こそ前掲の「重修立化寺碑記」(道光年間)に「これを遺銘に稽うるに凡そ立化祖師の顛末は一切備載されたり」とあるものにあたり、祖師の來歴が詳しく書かれてあつたものであるかも知れない。それにしても土匪は何故にかかる由緒の深い寺を襲い、あまつさえその石碑までを破壊したのであるか。土匪というても必ず何かしかるべき理由があつて蜂起するもので、無用な破壊などを行わないのが常である。ことに民衆の信仰する寺廟などには彼等とてやはり尊信の念を抱いているから、よし民家を襲うとも、相當の理由もなしに寺廟を破壊するようなことはない。石碑の如きも墓石や橋などに利用するの

はしばしば目撃したけれども、理由なしに破壊することなど滅多に起らぬものである。一體、何故に立化寺が襲われたのであろうか。

これについては全く推察の範圍を出ないけれども、その前々年九月に滿洲事變が起り、翌昭和七年夏には日本軍は熱河に進撃し、同八年一月には中國軍と山海關で衝突した。同二月には滿洲軍總司令部は熱河討伐を聲明し、朝陽を占領、三月には赤峰、凌源、承德を、更に灤平、古北口を占領するなど、戦火は察哈爾地方にも及ぶに至った。龐炳勛の暴行はこのような事態を背景として起ったものである。前述の如く石碑の如きものまで破壊するとは思議な所業としなければならぬ。周知の如く、碑文にせよ、文書にせよ、凡そ文字の書かれたものを粗末にしない中國人の習性から考えても、何か特別の理由があったればこそ、そのような行動に出たものと思われる。或は立化祖師が日本人であったことを知っていて、萬曆四十五年の碑文には道光の重修碑にもある如く、祖師の顛末が一切備載され、その偉行をほめたたえてあったので、排日的動機から行ったことではあるまいか。

右の如くしてグロータース師の提供して下さった調査記録、寫眞、地圖などはわたくしの研究にとって甚大な寄與であった、ただし、藤枝氏の所藏される西夏文經典と岩田氏の所藏のものとの照合の結果はどうであったか。藤枝氏のはかつて包頭で入手されたもので、同氏が石版刷といわれるものである。もし両者が同様に近代式の石版刷ならば岩田氏のものもちろん日持の遺品とはすることが出来ない。巻頭の佛畫も、巻末の位牌圖も、經文も内容は全く同じと判断された。わたくしは中國の石版刷の歴史はよく知らないが、西洋ではプラーグの人セネフェルター Aloys Senefelder (1772~1834) が一七九六年に發明したものであるというから、そう古いものではない。

しかるに日持の書きこみのある經文をよくよく檢するに、その朱墨といい紙質といい、極めて古いものであり、かつ筆蹟はまぎれもなく日持のものである。用紙や印刷技術などについてそれぞれの専門家の研究を請い、なるべく多數の人の意見を徴したいと考えているが、本稿の締切りがせまったので、これは後日の問題として残すことを許されたい。辭源の石版の項に「石版石を用いて製成する印刷版なり。その法は、まず原稿を以って影片を攝成し、動物膠を敷きし紙を覆い、而して影を其上に移し、紙を光潔の石に置いて之を緊壓し、痕を石面に留めしめ、塗るに松香油を以ってし、碾くに墨膠を以てし、その痕をして益々明顯にして高からしむ。然るのち水を用いて之を濕し、印刷用墨油を以って、紙上に印す。その文字圖畫のなき處は、水の反潑を受く。故に墨油は黏着する能わず云々」と説明してある。これによると、ある刷物と全く同様の石版刷をつくることも可能のようであり、その墨には特有の印刷用墨油を用いるものである。もし藤枝氏の説の如くその所藏さるるもの、天理大、京大東洋史研究室などのものが、みな石版刷のものであるとすると、この日持の書きこみのあるものは、それら石版刷の原本となったものと同種のものか、または更にそれに基いて作製したものであるかであろう。そのような原版が當時、宣徳府に住んでいた西夏系の人の間に傳わっていて、それを一千八十部印行して人々に頒つたのであろう。日持自身には西夏文は讀めなかつたと思われるが、これを「譯文冊」と呼んでいる、それだけに頒つ方も、もらう方も、かえって有難いものと考えたのではあるまいか。

何れにせよ、繰返して言う如く、東安市場で鍍金盒を買った中村某も、それを譲りうけた岩田翁も、その中に文書がひめてあるうなどは全く知らなかつたのである。これを賣った盗人も、古物商人も勿論氣づかなかつたらしい。岩田翁が鏽をけずりおとし、薬でみがいたのはじめて、あわせ目がわかつてこじ開け、文書を發見したのである。それが

ら時を経て手をつくして、やっと手に入れた經文の書き入れが、偶然この盒中の文書の書き入れと同一の筆蹟だったのであるから偽物をつくったと考える餘地がない。専門家の發掘とは事情がちがうから疑問をもたれるが、事實は事實であり、よく考えると整然とした経過を辿っていることがわかる。藤枝、西田の諸氏がその専門の見地から疑問を示されたことは、この研究にとつて有難いことであつた。しかしわたくしはどこまでも、この西夏文經典も日持の遺品と信じている。石版刷偽經にしてもその基いた原典があるはずで、この原典をつきとめ、それと宣化出土のものとを比較してはじめてこの問題は解決するであらう。



第十五圖 宣化出土の薰香入

十五、印籠その他の品々

既述の品々のほかに高さ三吋あまりの黒色の粗朴な焼物がある。前文に香爐としておいたが、その内部の底に「日持」と墨書し、同じく内側の横腹にそつて「南無妙法蓮華經」と横に書き、その南字と經字の中間の所へ縦に

薰香入

十六文

と二行にしるしてある。して見ると香入れに用いたものかも知れない。(第十五圖参照)それと黒漆塗の直徑一・八吋ほどの丸い器具があ

るが、香盒または肉池に用いたものであろう。

印籠についても問題は簡短でない。昨年の暮、上野の博物館に赴いて意見をきいたときには徳川中期以後の印籠というものは存在しないという解答であった。しかしまたある専門家の説では宋元時代に中國で行われたものが傳わつたのであろうという。筆者はこの方面には全くの素人であるし、専門家の意見をたたいても答はまちまちでいまだはっきりとした、また納得のいくような教をうけたことがない、しかし、岩田氏將來のものが實際に日持の遺品とすれば、これは鎌倉時代のものであって、しかも身延山久遠寺においてはなむけに贈られたと書いてあるから、日本を出るときにもって行ったものにちがいない。そして現存する最古の印籠の實例となし得るであらう。

廣文庫に引用された人見雜記という書に「印籠といへる佩物、無下に近き代の華美を好めるより、名を印にかり用を借りし翫物とおもひしに、藤原の經嗣公の書き給ひし北山行幸記に、鹿苑院殿より、女院へ御贈り物は、御小袖十重、印籠香盆にすゑて參らせらるとあり、義滿公の時、早くありしと見えたり」とある。北山行幸記は中山宣親の著わすところ、應永十五年（一四〇八）三月に後小松天皇が足利義滿の北山別荘に行幸されたときの記録という。また四季草（秋の下二一）には「印籠巾着の事、室町家の頃までは腰刀に火打袋を付くる事ありし也。巾着は此の火打袋の變化なるべし。印籠といふ物も、古もありしものなれども、腰に佩ぶる物にはあらず。大體三寸五分四方斗ばかりにして三四重ばかりの重筥なり。堆朱などにしたる物なり。是れは異國より渡りたるものにして、唐人の印并に印肉を入れる箱也。又同じやうにて丸き重筥もあり。是れは藥籠とて異國にて煉藥を入れるもの也。此の二色、ともに此方にては違ひ棚の飾りなどに置くものなり。腰に佩ぶるを名を印籠と云ひて、藥を入れる所の用は藥籠也。此の物若し信長秀吉など

のころ、軍中の用意に鎧の上帯に付くる爲に作り出でし物にても有るべきか。今も古印籠に東山殿時代の蒔繪なりといふものあり。東山時代に此のものなし。心得がたき物也云々」とあつて、信長・秀吉のところに工夫されたものではないかという考えを述べているが、喜多村信節はそれをしりぞけて(嬉遊笑覽二)「印籠は下學集に印籠(箕同)と見え、林逸節用集に印籠と見ゆ。同書に藥籠も出でたり。……印籠は名のみにて、其の用は藥入なれば、實は藥籠なり。安齋云ふ此の物もしは信長秀吉などの頃、軍中の用意に鎧の上帯に付くる爲に作り出せし物にてもあるべきかなどいへるはわろし。尺素往來に丸藥等の事を云ひて、當世人々火燧袋之底面に小藥器之中必齎持之、以不得貯、爲恥辱候とあり云々」と云つてゐる。

更に松屋筆記にも「印籠は北山行幸記に應永十五年三月十四日云々、崇賢門院へも行幸あり云々、女院御たいめんのごしきなども、同じ事にてはべるにや、御おくり物に、御小そで一重、いんろうかうぼんにすゑてまゐらせらる云々。寛正七年二月廿五日、飯尾宅御成記に御印籠一、堆紅云々、下學集器財門運歩色葉集以部などにも見えたれど今の製とひとしきや未詳」とある。

同じく廣文庫の「藥籠」の項には近世風俗志(下)をひき「やくろうと云はずやろうと云ひ、やろう蓋と云ふなり。今世にては却つて印籠蓋と云ふなり」とし、貞文雜記(八)をひき「藥籠と云ふ物有り、印籠の如くにて丸き重箱也。唐土にて藥を入る物也」とある。しかし中國の藥籠というのは、わが國の携帶用の印籠よりもっと大型のものかと思われる。元の王渾はその著「編年記事」に序して「ああ吾年耄に向い、前日進みし所、今日、その忘を覺らず。小子それ之を秘めてもつて吾家の藥籠中に備えて用いて可なり。」と云つてゐる。^(一三四) 比喩的の言葉かも知れないが、かなり大型のも

のを思わせる。もっとも彼土にも携帶用のものも行われたことは十分に考えられる。尺素^{セキソ}往來二卷は一條兼良（文明十三年四月二日—一四八一—八十歳で歿）の著、下學集は後花園天皇の文安元年（一四四四）ころのもの、林宗二の節用集は、後土御門天皇の明應五年（一四九六）の作と國書解題にあるから、やはり北山行幸記に現われたのが、最も古い印籠の記録らしい。これより更に古いものがあるかどうか、また室町時代の印籠の形式などについても、目下のところでは筆者の知り得ぬところである。ただここにまた推察を試みれば、この品は唐土に赴いた佛僧たちによってかなり早くからわが國にも傳わったのではないかと思う。一般にはひろまらぬとしても、貴族や佛家の間には所藏するものがあったので、その一つがたまたま決死の雄圖に旅立とうとしていた日持に贈られたものではあるまいか。贈った人の名前は磨滅して判然しないが久遠寺の住職日向か、特に日持と親しかったと思われる日淨か、或は他の人か、その邊のところは想像に任せる外ない。磨滅した文字を何とか判讀するために、昨年暮、文化財研究所に持參し、秋山光和先生の御厚意により、いろいろ手をつくして頂いたけれどもついに不成功に終わった。

結 論

種々の解釋不十分な點を残しながら、わたくしは立化寺から持ち出され、岩田翁の苦心によって僅に亡滅から救われたこれらの品々を悉く日持上人の遺品と信ずるものである。不明な諸點も今後の研究によって徐々に解消して行くことと思ひ、かつそれを熱望している。そのみでなく、これら難解のところこそ、やがては歴史上の種々の面に新しい光明をそそぐ窓やその鍵などになるかも知れない。

未解決な諸問題をもう少し究明し、更に徹底した意見を示さぬことをとがめられはせぬかと恐れたけれども、これらを一々明瞭にすることが果して非才の身になうものであるか、假になうとしても更になりの時日を要することを、無常迅速の宿命と思ひあわせて、一まず發表の決意を固めた。また、廣く各方面の専門家の目に入れた方が解決を早めるかとも思ったからであり。部分的の疑點や不明點でいつまでも埋もれたままにしておくにしのびなかったからでもある。今まで紹介してきた遺品によって日持上人の大陸渡航前後の事跡を想像すると次の如くである。

永仁三年(一二九五)正月元旦駿河國松野村の蓮永寺を發足、津輕の笠松峠(法峠)を越えて今の青森市邊に至り、路を左にとつて津輕半島の東海岸、つまり今の松前街道の走っているあたりを石崎まで北上した。石崎は半島の東北端に近い平館村(タイラケテ)のうちにある。そこから便船を得て今の函館附近に渡った。錢龜澤村の石崎は恐らくその滞在地であろう。そこからアイヌ人の船によって大陸に渡ったという傳説も實際かと思われるが、渡島地方にいたのはせいぜい一年前後と見るべく、永仁四年の六月ころにでも(六月一日出發という北海道地方の所傳をとり上げるとして)、沿海州か朝鮮の咸鏡道方面にむけて船出したものと想像する。滿洲を経て元の上都開平を訪れ、更に大都(北京)を志す途中、機縁あって宣德府城(今の宣化市)に錫をとどめることになった。それはおそくとも永仁五年の秋まででなくてはならぬ。その年の冬、夢寐にも忘れ得ぬ師日蓮の像を自ら石に刻し、或は故郷を出るときから奉持していた畫像を示して工人に刻せしめ、府城のかたほとりに草堂を結んで法華寺安國堂となづけた。このようなことが出來たのは恐らく上人の徳を慕って供養し、何かと援助をおしまなかつたかなり有力な市民があつたからであろう。

翌くれば元の大徳二年(一二九七)、四十九才のとき、正月十六日、西夏文華嚴經の一部分を一千八十部刊行して、人

々に頒與した。日持上人がそのころ西夏文字を讀み得たとは思われぬが、恐らくはもとの西夏國人で宣德府に住んでゐる人々が相當數いて、その人々と上人とが特別の關係があつたためかと思われる。宣德居住の西夏人の一例をあげると元曲の作家として知られた李伯瞻の如きも先祖は西夏の人で、父李世安は西夏名を散木饒といい、元の憲宗の時代に宣德府龍門川に生まれ、人々から李龍川と稱せられた。西夏の王家の流れであつたことはその父李恆について姚燾の撰した「武愍公李公家廟碑」に「李恆、其先姓於彌氏、唐末賜姓李、世爲西夏國王云々」とあるによつても明かである。(一三五)

大德五年(一三〇一)、日持は五十二歳となつた。夏六月、宣德一帶に大水があつた由が記録に見える(康熙宣化縣志卷十二)。ひきつづいて府城に住んでいたが、夏去り、氣澄んで雁のわたりくるころ、病床に臥すこと十日あまり、ある日、恩師日蓮に従つて、富士川畔の松野に父母を省するおのが姿を夢ともなくうつともなく見た。懷郷の情すずろにて、涙は袖をうるおすばかりであつた。そのころ、かねて奉持してきた師の筆になる七字の御題目と、その尊影とが年をへて破損はしないかと恐れていたが、折よく、城内でうすいなめし革を賣るものを見た。麝香鹿の皮だといふので、さっそくに買ひもとめて表装した。松野を門出する朝、自身もまたお題目をしるし、その傍に所懷を詩に托しておいたので、これも同時に表装し、それらの裏に、詩二首、及び表装の由來などを書き入れた。それは九月十七日のことである。故國との音信は全く絶えたが、なお永仁の年號をも書きつづけていた。

宣德府において、日持に歸依した人々のうちに鄭日昌という老翁があり、すでに八十五歳であつたが、表装を終つた日蓮祖師の肖像を見、二拜三拜し、その祖國(恐らくは西夏)の滅亡のことを語り、西夏文字で七言絶句とおもわれる詩を書きつけ、妙法の實行達成を誓つた。

翌大德六年、日持は五十三歳を迎えた。十月某日、信徒のうちに李氏なにがしという女性があって、美しい花鳥の刺繡のある袱紗を寄進した。「信女弟子余門李氏供奉」としてあるが、これは李家に生れ、余家にとついだことを示すものと思われ^(二三六)る。この袱紗はいまは、見るかげもなく色あせてはいるが、そのかみの優美さ、高雅さをなおどことなくしのばすものがある。素朴な日持晩年の遺品中、これのみがほのかなやさしさあでやかさをとどめている。

大德八年には日持は五十五歳となった。故國を出てすでに十年目である。鄭日昌老人も八十八歳となり、その祝いに二月十日の日づけを入れた鍍金盒を寄進した。この中に麝香鹿の皮に表装した三枚の文書を叮寧にたたんで納めてあったところを見ると、そのためにとてわざわざ鄭老人が工匠王吉に注文して作らしたものかも知れない。

遺品によって知るうる日持上人の事蹟はこれが最後である。磨滅した木魚、高さ五寸ばかりの青銅の佛像、日蓮の石像などは岩田氏がもちかえることが出来なかつた品々であるが、その外にもなお入手し得なかつた十數點の遺品があったという。それらはどのようなものか知ることが出来ない。つぶしのきくようなもの、金目のものなどはよし有つたにせよ恐らく盗人によって處分され、彼等にとっては比較的役にたたぬもののみが岩田翁の手に集つたものかと想像される。それにしても、従來の説の如く外蒙古のはずれで元の晉宗の泰定元年または二年(一三二四または二五)に七十五または七十六歳で歿したなどという説は信じられない。上人は今の宣化で、傳説によれば安坐したままに示寂し、茶毗に附さるる際、猛火のなかに立上つたというが、死體の硬直ということから見て十分にあり得ることである、しかし土地の人々はこれを奇異とし、また生前の高徳を慕い、立化祖師と呼んで、永く後世に語り傳えたのみでなく、その爲に塔を建て、像を祀り、寺宇を修築して今に至つたのである。その示寂の年月は不明であつて大德八年後とする外にせん

すべもない。たまたま昭和八年、中國人のわが國に對する感情の最も悪化したとき、土匪のしわざたる破壊が行われ、塔の一部から上人の遺品が盗み出されるといふような不祥事も起つたが、その一つが偶然にも北京在住の一邦人の手に入り、これが端著となつて九品の遺物が故國へもどつて來たのは不幸中のなぐさめであつた。昭和二十三年八月、ベルギーの學者グロース師が調査したときは、うちわられた碑石の如きものは別として、塔や佛殿などすでに修理され、寺内整然として一人の住持の僧に守られていたという。

日持上人がかの地に傳えた法華の妙法はその後信徒も絶えたことと思われるが、こうして民間信仰の對照として今日まで奉祀されていることを思えば彼もまた不朽に生き得た一人としなくてはならぬ。その英魂は、異邦の男女に見まもられつつ、紅蓮の炎のうちに凝立したそのむくろを去つたのであるが、はたして何處に天翔つたのであろうか。松籟こむる鎌倉の草庵か、山緑に河水きよき松野の里か、師の眠る身延の山か、それらは渡海以後つねに慕いつづけたところではあろうが、しかし上谷の古城宣化こそそのあまんにて永久に留まろうとしたところではなかつたかとも思われる。これこそ千古に解き得ぬ謎ながら今も上人のあとを戀うものは更に廣大な地域にわたつてあとを絶たぬようである。

註

- (一一〇) 中里右吉郎・日持上人大陸踏破事蹟、頁四六一五一。
- (一一一) 平凡社・世界歴史事典「カラクホルム」の項。
- (一一二) 中里氏右掲書、頁五三―五六。
- (一一三) 同右、頁五六―五七。
- (一一四) 同右、頁五七―六一。

日持上人の大陸渡航について(下) (前嶋信次)

(一八三)

四七

- (一一五) 同右、頁六三―六五。
- (一二六) 同右、頁六六―七五。
- (一二七) 遼史本紀(卷十二)にも同様の記事がある。
- (一二八) 顧祖禹「讀史方輿紀要」(卷十八)萬全都指揮使司の中の「天德山」の項に宣化城の東六十里の湯池山には温泉がわき、遼が黎園を山下に置いたとある、また炭山は宣化城の西百二十里にあり、遼朝の涼殿があつたとしてある。
- (一二九) 遼史卷四〇、地理志四、南京道。
- (一二〇) 慶長十九年―文祿二年(一五九一―一五九三)の間の作といわれる。(藤田元春・日本地理學史―昭和七年十一月、刀江書院)頁一六四―一六五。
- (一二一) 藤田元春・日本地理學史、頁一六六。
- (一二二) 藤田氏右掲書、頁一七八―一八一。
- (一二三) 同右、頁八〇―八三。
- (一二四) 道光の重修事業にあつた僧靜天がドロン・ノールで坐禪し、寺を上谷の郡城で修めたのも立化祖師の至行に感動したため云々とする所から想像したにすぎない。
- (一二五) 王國維、「長春真人西遊記校註」全集本卷上、第八葉裏。
- (一二六) 元文類(國學基本叢書本)卷五七、頁八三三。
- (一二七) 同右、頁八三二。
- (一二八) 秋澗先生大全文集(四部叢書刊本)卷八十。
- (一二九) 蔡美彪「元代白話碑錄」一九五五、北京、頁二八。
- (一三〇) 元文類(國學基本叢書本)卷二六、頁三三一。
- (一三一) 桑原隲藏「東西交通史論叢」(昭和八、弘文堂)頁五一―九。

(一三二) 宜府鎮志卷十二、宮宇考。

(一三三) 胡都(胡毒または胡瀆)はグロターズ師によれば蒙古語で「幸福」を意味し、雨の神である。(cf. Willem A. Grootaers,

The Hutu god of Wanch'uan, a problem of method in folklore, Studia Serica, Ch'engtu, VII, 1948)

(一三四) 秋澗先生大全文集、卷四十二。

(一三五) 孫楷第「元曲家攷畧」(一九五三年上海) 頁一〇六一—一〇九。

(一三六) 李姓の者は李伯瞻の場合の如く、西夏人に多くあるが、余姓にも元代の有名詩人余廷心(名は闕)の如くタングイト族のものもあつた(陳垣「元西域人華化考」國學季刊第一卷第四號、頁六二九)。しかしこの場合に余門李氏という女姓が西夏系の人であつたかどうかは不明である。余門を地名と見て、その李氏とする考もあるが、恐らくそうではあるまい。余門の李氏というのは寡聞のためか見当らぬ。

本稿は昭和三十一年度文部省科學研究費(各個研究)による研究成果の一部である。

附記 本稿再校を終つたあと、西田龍雄京大講師からビブリア第九號に發表された「天理圖書館所藏西夏語文書について」(1)の抜刷を贈られた。その中で西田氏は本稿に現われる西夏經典斷卷も「後世の石版複製本である」と斷定されている。この意見には承服し得ないものがある。いずれ詳しく卑見を述べてその理由をあげたいと考えている。